

領域・境界 ―長重之の〈視床〉―

長重之の足利のアトリエには何度も伺う機会があった。今でも足利へ行くと白いスニーカー姿の長さんに会えるような、そんな気持ちになる。長さんのお宅で話を聞くと、必ず長家の話が出てくる。長の祖父の祐之（1867-1928）は、梁田村会議員、栃木県議会議員、足利町長を務めるなど、この地域の名士であった。また、長家は代々の大地主でもあり、本庄高富藩の分領地代官を務める旧家でもあった。重之は、9歳で足利に疎開すると、その翌年には父を失い、家督を継ぐことになる。

長の〈視床〉シリーズを考える時、土地に対する感覚というのは、非常に重要な要素である。歴史の変遷の中で農地改革、キャサリン台風後の渡良瀬川の改修を通じて、長が先祖から継承した土地は、時に切り売りされ、区画整備の名の元に境界が設けられていった。原野だった場所が、誰かの所有のものとなり、価値づけされ、売買の対象となるという意味で、土地の所有やその流動性は、資本主義社会の根幹を形成している。長は、先祖代々引き継いできた母屋の解体を仲間たちと行いその映像を《原野》と名付けて作品化している。家が解体されることで、その土地は本来の土地に戻ることを意識したのだろう。

また、〈視床〉とは、間脳の一部であり、嗅覚以外の全ての感覚をつかさどる器官である。長にとって、作品を見る際の視点の

問題は重要で、本作《視床》は、床に直接置かれることで、私たちは俯瞰して作品を見ることも寝転がって作品を見ることも可能であり、自由な視点からイメージを統合することができる。床置きにすることで、私たちはその先にある広大な土地を想像すること、境界で狭められた土地の窮屈さを感じることも自由だ。長は、作品のイメージを「ページのない本」「透明な辞書」と例えているように、長の作品を前にすると、一つの原野を通じて時間と空間を超えた体験が一瞬にして私たちの身体を通過する。